



# 我が人生の師

## 安久津勝彦

二月二五日の誕生日で五八歳になり、この間の人生で影響（教え）を受けた方々を想うことがたびたびある。

どんなときかと言うと、「職員採用時の面接試験の際」私の質問の中で必ず問うていること、また「節目節目」であったり、「自分自身の確認・検証」として振り返るときが多い。

小学生のときは「小森校長先生」である。

校長先生は穏やかでいつも笑顔を絶やさず、本当に大きな人であった。妙な言い方になるかもしれないが、小学生のころよりも中学生になってからいろいろな意味で影響を受けた。「人と人との関係つながりの大切さ、ものの見方・考え方の基本」を教わった。そして何よりも一番の

親友「水谷」との出会い、校長先生が前任の小学校へ何人かの友と一緒に連れて行ってくれたことによるものだった。

その後は一度も会っていなかったが、高校に入学して同じクラスになり、また父親が同じ鍛冶屋であったこともあるのかもしれないが、校長先生がきっかけをつくってくれたかけがいのない親友の存在である。

高校を卒業した一九七〇（昭和四五）

年四月から私は足寄町役場にお世話なることとなった。数年後小・中学校で同級生だった友人が亡くなり、通夜に参列した会場で校長先生から明日の告別式で友人を代表して弔辞にて別れを述べるべし、との助言をいただき、弔辞など経験もな少々の戸惑いもあったが、素直な気持ち

ちで思いのたけを述べ友人との最後のお別れをできた。また普段音信不通の状態にもかかわらず、二〇〇三（平成一五）年に町長当選時にいち早くお祝いの連絡を頂く等々ただただ感謝である。校長先生は俳句の指導で各地を歩きすこぶる元気であり、一〇〇歳まで元気に願っていたが昨年他界された。蛇足であるが、マージャンを教わったのも校長先生である。

中学生では、二人の師がいる。英語の先生で後にクラス担任になられた、「小野先生」からは二つのことを教わった。一つは何かの悪さをしたとき体育館にて、先生はバットを片手にいいかよく聞け「お前たち二人に初めて恥ずかしいということ教える」といつて二〜三回尻を打たれた。大いに反省させられた正に愛のムチであった。二つはどんなときかは覚えていないが、「知性と理性」のお話があり、特に感じいったのは理性の大切さで、私なりの解釈として「自分を見失うことなくときには自己抑制ができることが極めて大切であること」常に状況判断せよと教えられたと頭の隅にいれている。

「高橋房子先生」は、中学二年生になったときに赴任されたと思うが、理屈抜きで大好きな先生であり、前述の亡くなっ



た友人とほぼ毎日先生宅に入り浸りの状態だった。見かねた校長先生が高橋先生に注意をされたと聞いたが、それ以降も先生は、我々には何も言わず笑顔で対応してくれた。田舎育ちの私が着任間もない先生に対し何がそうさせたのか自分でもわからないが、表現は適切でないかもしれないが教師と生徒の力べを感じさせない先生であったし、存在そのものが私にとって大きなものであった（よく言われる先生に対する恋心とか憧れのものではない）。「来るもの拒まず、人の話を聞く姿勢」を教わったと思う。

高橋先生とは社会人になってから、一度手紙のやり取りをした程度で音信不通の状態であったが、町長に就任後先生の方からあのときの生徒でないかと気にかけていたとお聞きし、先生のご自宅を教

えていただき再会することができた。積もる話の最後に、大変失礼と思いつつも先生の教科担任は国語であったことを確認し、何故こんなことを問うたかと言うと「先生の授業については何一つ覚えていない」ことを明かし大爆笑で再会を終えた。

高校時代の「山口先生」にも大変お世話になった。現在首長という立場で中高の入学式・卒業式に出席した際に、必ずお話をさせていただいていることは「貴方たちはこの世にたった一人しか存在しない宝物であること、この宝物は未来に無限大の可能性を秘めた原石であること、一番になれとは言わないが自らの手で原石磨きをし、オンリーワンの自分・自己主張できる存在を目指していただきたい」と語りかけている。正に私が出会った先生方の存在は大変大きく、ただただ感謝である。

「我が人生の師」一番は父親である。私は父が四二歳のとき鍛冶屋の息子として誕生した。父は勤勉であり地域活動（世話役）もやり、地域の消防団長・更別村の村議会議員の公職も務めた。我が家への来客は多くいつも笑顔で誰でも迎え入れていた。人に優しく自分に厳しい人であったと思う。私に対しても大変やさし

く、山菜採りに出かけるときなどオートバイに乗せ連れて行ってくれた。反面厳しきもあり悪さをしたときには、真っ暗な「ムロ」に入れられたことも数回あったし、火バサミで尻を打たれたこともあった。そのたびに反省させられ、謝ることの大切さを教えられた。

私が四二歳のとき父は八四歳でこの世をさった。晩年は痴呆になり徘徊もしたし、あるときは娘の言うことも聞かなかつたが私の妻の言うことは聞き入れた。これは妻が母親になっていいると思ったり、父の頭の中ではこれまでとは違う別な世界が広がっていると感じた。大変な思いをしたが、介護という厳しい現実を経験させてくれたことも含め、物心がついたころから亡くなるまで父親として「大きな背中を見せ育ててくれた」と感謝の念である。

この他にも五八年間で多くの人と出会い、刺激を受けご指導をいただいたことにより今の自分があると思う。

多くの教えを礎に、先人が切り開いた我がまち足寄町「住んでいて良かったと思える町づくり」に町民とともにまい進したいと思うところである。

△あくつ かつひこ・足寄町長